



歴史舞台を駆けた

南アルプス市の
甲斐源氏

南アルプス市教育委員会



ステージ

stage

古代末から中世にかけての南アルブス市は、甲斐源氏とよばれる源氏の一派が、拠点とした「源氏の里」であつたことが知られています。その南アルブス市域に入ると足跡が見られるようになるのは、早くも2万年前、旧石器時代のことです。市之瀬台地の上からは、彼らの使った黒曜石の石器などが発見されています。続く縄文時代には、市之瀬台地や、上八田、下八田、徳永といった地域で縄文時代の遺跡が数多く発見され、下市之瀬においては

る「鋪物師屋(いもじや)遺跡」から
発見された土器や土偶は、現在国の重
要文化財となっています。

弥生時代、山梨県に稻作の技術がも
たらされると、谷筋などで栽培が試さ
れるとともに、まもなく御動使川(み
だいがわ)扇状地の末端の湧水線に
沿つて水田や集落が営まれるようにな
ります。(御動使川遺跡末端の遺跡群)
田島の「油田遺跡」からは、水耕耕作
に関わるものとしては山梨県で発見さ
れている最古の農具である「豎杵(た
てぎね)」が出土し、これが早くから

稲作に適した土地であったことがわかれます。続く古墳時代には、御動使川層状地の扇端位に位置する現在の中部横断道の南アルプスへ周辺に、大規模なムラ（村前東A遺跡など）が営まれ、県指定文化財である「物見塚古墳」をはじめとして数多くの古墳が造られました。

一方、広大なからはつ地帯であるところから、それまで人々の足跡を見ることがほとんど見ることでなかつた。御勤使川扇状地の扇央地域も、平安時代になると新たなフロンティアを開拓すべく、このような土地に適応した手段として、後に「八田牧ほだのまき」¹⁾と呼ばれる大規模な牛馬の飼育施設が置かれ開発が進みました。²⁾一方御勤使川扇状地末端の湧水線の下流域では、弥生時代以降度重なる水害に見舞われながらも水田開発へのアプローチが続けられ、近年の発掘調査の成果か

う、おそらくこの頃には現在も地域に色濃く残る「条里型の土地割り」(※)が施工され、新たな農業基盤の整備が進んだことが明らかにされています。

このような局状地の開発に伴う経済的基盤を背景に、平安時代末から鎌倉時代には甲斐源氏「加賀美遠光」が市内に拠点を構え、その子「秋山光朝」、「小笠原長清」らを周辺に配して勢力を固めました。南アルブス

南アルプス市を駆けた甲斐源氏清躍の背景には、このような重厚な南アルプス市の歴史があり、このような歴史舞台があつたからこそ彼らやその子孫たちは全国に飛躍していくことができたともいえるのです。

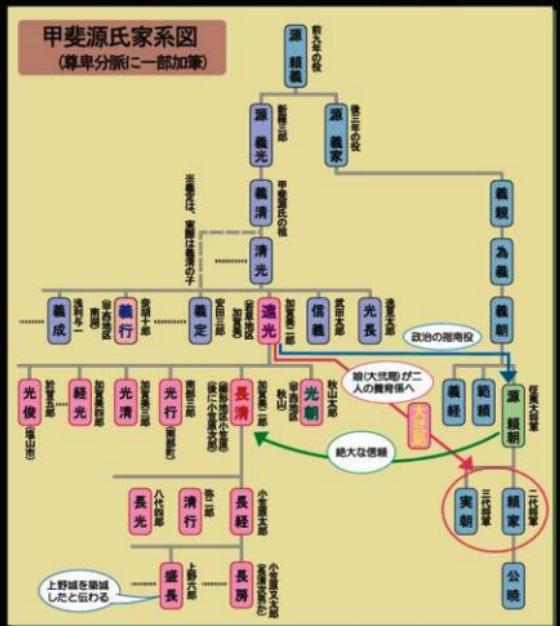
原始・古代を通して地域間交流、地域内交流の拠点であり続けたことがわかつています。近年「甲斐国」は「交ひ国」で合つたことが明らかにされていますが、南アルプス市周辺はまさに「交ひの場所」であり、かれら甲斐源氏の経済基盤を支えた要素のひとつとすることはできます。

市域にまづ足跡を残した遠光か居を構えたとされる場所（現在の加賀美山法善寺）は、新たに農業の整備が進んだ条里地割の中にあり、後背には馬の供給地である「八田牧」が控えます。さらに忘れてはならないのは、この地域は、富士川を登ってきた文化の到達点として、歴史的に見ても駿河（信濃）を結ぶ結節点であり、扇状地と下流の沼澤原との地形的境界でもあつたことです。現在もその起源が中世にさかのぼる。「十日市（市指定史跡）」が開かれていることに象徴されるように、

ルーツ

roots

甲斐源氏家系図 (算卦分析に一部加筆)



甲斐国、現在の山梨県に拠った清和源氏の祖は、清和源氏の嫡流八幡太郎斐源氏の弟、新羅三郎義光とされてきました。しかし実際には、義光の甲斐國司補任の可能性は極めて低く、現在では甲斐國に初めて土着し、実質的に甲斐源氏の祖となつたのは義光の子、源義清とされています。その契機となつたのは、大治五年（一一三〇）、それまで拠点としていた常陸國（茨城県）における義清の子、清光の遅行に対する

市河莊（現在の中巨摩郡昭和町から中央市、西八代郡市川三郷町周辺）でしめた。その子清光は、拠点を古代から牛馬を飼育する「牧」が発達してきた逸見（現在の北都市）の地に移しつつ、自らの子どもたちを甲斐国内の各地に配してその基盤を固め、源平合戦、いわゆる第陸國司の訴えです。これにより義清父子は常陸國から甲斐國に移され、ここに甲斐源氏の歴史は始まります。

甲斐國で義清がまず拠点としたのは市河莊（現在の中巨摩郡昭和町から中央市、西八代郡市川三郷町周辺）でしめた。その子清光は、拠点を古代から牛馬を飼育する「牧」が発達してきた逸見（現在の北都市）の地に移しつつ、自らの子どもたちを甲斐国内の各地に配してその基盤を固め、源平合戦、い

る第陸國司の訴えです。これにより義清父子は常陸國から甲斐國に移され、ここに甲斐源氏の歴史は始まります。甲斐國は、清光の子孫たちの中でも、大きく武田、加賀美、安田を中心とした三勢力が割拠しました。

その中の加賀美源氏が基盤として「名字の地」としたのが、現在南アルプス市加賀美周辺に比定されている加賀美莊です。遠光もまた長男元綱は秋山市（現在の北杜市）といつた具合に、自らの子らを支配地域である甲府盆地西部から富士川流域の要衝に配してその基盤を固めました。このほか市内には、奈胡莊（現在の東南湖、西南湖周辺）に遠光の弟である信朝十郎義定が拠りました。

ところで、「甲斐の黒駒」で知られるように、甲斐國は、先に述べた「八田牧」以前、古代から朝廷の「御牧」が置かれ、良質な馬の産地として知られており、これが甲斐源氏の強力な武芸や軍事力を支えたことが指摘されています。保元の乱や平治の乱で清和源氏の嫡流が没落する中、甲斐源氏は勢力を温存し、その武芸や軍事力を背景に治承・寿永の内乱期以降、鎌倉幕府の成立を軍事面や政治面で支えていくことになるのです。

このような甲斐源氏は、頼朝に信頼される一方で、その力を警戒する存在でもありました。鎌倉幕府の基盤が整

わゆる治承・寿永の内乱の頃には、甲斐國は、清光の子孫たちの中でも、大きく武田、加賀美、安田を中心とした三勢力が割拠しました。

その中の加賀美源氏が基盤として「名字の地」としたのが、現在南アルプス市加賀美周辺に比定されている加賀美莊です。遠光もまた長男元綱は秋山市（現在の北杜市）といつた具合に、自らの子らを支配地域である甲府盆地西部から富士川流域の要衝に配してその基盤を固めました。このほか市内には、奈胡莊（現在の東南湖、西南湖周辺）に遠光の弟である信朝十郎義定が拠りました。

ところで、「甲斐の黒駒」で知られるように、甲斐國は、先に述べた「八田牧」以前、古代から朝廷の「御牧」が置かれ、良質な馬の産地として知られており、これが甲斐源氏の強力な武芸や軍事力を支えたことが指摘されています。保元の乱や平治の乱で清和源氏の嫡流が没落する中、甲斐源氏は勢力を温存し、その武芸や軍事力を背景に治承・寿永の内乱期以降、鎌倉幕府の成立を軍事面や政治面で支えていくことになるのです。

このような甲斐源氏は、鎌倉幕府の基盤が整



キヤスト

cast

加賀美遠光



南アルプス市に初めて足跡を残した
甲斐源氏、加賀美遠光は、康治二年
(一四三) 源清光の三男として生まれたとされ、現在の南アルプス市加賀
美の地を拠点として甲府盆地西部から
富士川流域に勢力をを持ちました。
身延町にある大聖寺の本尊「不動明
王坐像(重文)」は承安元年(一七一)
に宮中守護の功績により、遠光が高倉
天皇から下賜され、京からの帰路現在
の大聖寺の地に安置されたものと伝え
逸話から、遠光自身の上京の可能性や
京都とのつながりをつかがい知ることができます。なお、この時併せて「王」
の字も勘許され、加賀美一族の紋である「三階雲」は、この「王」の字
を因案化したものと伝えられます。



加賀美遠光公廟所（遠光大明神 加賀美）

秋山光朝



光朝は加賀美遠光の長子として生まれ、成長して南アルプス市秋山に拠点を構え、「秋山」の姓を名乗ったとさる。元仁元年(一二三四)といわれ、墓所、供養塔として、館跡と伝えられる加賀美の法善寺の南に廟所(通称遠
光明神)があるほか、光朝、同夫人とともに祀られた秋山の光昌寺の五輪塔、遠光開基と伝えられる甲府市遠光寺の五輪塔などが知られています。

光朝は加賀美遠光の長子として生まれ、成長して南アルプス市秋山に拠点を構え、「秋山」の姓を名乗ったとさる。元仁元年(一二三四)といわれ、墓所、供養塔として、館跡と伝えられる加賀美の法善寺の南に廟所(通称遠
光明神)があるほか、光朝、同夫人とともに祀られた秋山の光昌寺の五輪塔、遠光開基と伝えられる甲府市遠光寺の五輪塔などが知られています。

秋山周辺には、光朝伝承と結びいた
遺跡や史跡が点在しています。光朝が
館を構えたとされる熊野神社やその南
には光朝開基と伝えられる光昌寺と光
朝を祀った廟所があり、父遠光と光朝
の木像がともに安置されています。そ
の境内には、遠光・光朝・同夫人の墓
と伝えられる五輪塔もあり、現在でも
地域の人々から厚く信仰されています。

地域の伝承では、光朝は鎌倉勢に攻
められ、西山にある雨鳴城で自害した
と伝えられています。しかし秋山の血
筋は途絶えることなく、光朝の子孫は
後世の史料の「甲斐国志」では清盛の
嫡男重盛の娘を娶つたと伝えられるな
ど、平氏政権の一翼を担つていたと考
えられます。こうした状況からか、治
承四年(一一八〇)の頼朝挙兵時に長
清が比較的早く京を離れ頼朝と合流し
たのに対し、光朝は京に留まり、これ
が後に頼朝から疎まれる要因となつた
とも言われます。文治元年(一一八五)
に頼朝が弟範頼に出した手紙には「光
朝は、平家に付き、又木曾に付きて、
心不善につかいたりし人にて候え、
所知など奉るべきには及ばぬ人」と嚴
しく評されています。この後の光朝の
歴史にはつきりとした足跡を残すこ



遠光・光朝及び夫人の墓（市指定 光昌寺）

小笠原氏の始祖
加賀美遠光の次男として應保二年
(一一六二)三月五日に生まれ、母は
和田義盛の娘とも三浦義澄の娘ともい
われます。原小笠原莊(南アルプス市
小笠原)を本拠とし、小笠原長清と称
しました。

「御所庭(ごしょのにわ)」や「的場」
という地名の残る小笠原小学校付近に
館を構えたと考えられています。

兄である秋山光朝とともに在京し、
平知盛に家礼として出仕していました
が、平氏追討の令旨には加賀美一族で
はいち早く呼応しています。

小笠原長清



加賀美遠光、小笠原長清父子像(開善寺所蔵)より

長清は弓馬の術に優れており、武
田信光などとともに「弓馬の四天
王」に数えられたとされ、建久四年
(一一九三)には、頼朝が下野国那須
野はかで春狩をした際に弓箭の所持を
許可された三三名に選ばれています。
また、長清以降、弓馬術の伝統は代々
小笠原家に受け継がれていくこととな
るのです。

承久の乱において、武田信光とともに
に東山道大將軍として活躍し、鎌倉幕
府の軍勢を率いて上洛した後、長清は
京都に生活の基盤を置きます。

長清は父遠光とともに鎌倉幕府の創
建に活躍し、源頼朝の絶大な信頼を得
ます。治承五年(一一八一)には頼朝
の声かけにより有力御家人の上総介
廣常の娘と結婚し、また、文治元年
(一一八五)、平家討伐で頼朝の弟範頼
の配下にいる際には、頼朝が範頼に完
て「かがみ殿(長清)」ことにしてお
が描かれていることがわかります。

奈胡十郎義行は、系図によれば源清
光の子で、加賀美遠光の弟にあたり
ます。八条院の藏人(くろうど)で
あつたので、「吾妻鏡」には奈胡藏人
または奈胡藏人義行とみえ、文治元年
(一一八五)、勝長寿院供養の源頼朝
の行列をはじめ、建久六年(一一九五)
の頼朝の東大寺供養(天王寺参り)の隨
兵となるなど、供奉人として計七回そ
の名を見つけることができます。奈胡

莊に拠って名字の地としました。
その生涯や屋敷地などは必ずしも明
らかではありませんが、墓地について
は、「甲斐國志」に「東南湖二十郎樹
ト伝フ処ソノ墓所ナリト云ヒ伝フ」と
あり、現在の東南湖寺十郎木にあつた
ことか伝えられます。ここには近代
になって地域の人々によって墓碑が立
てられました。金無川の水害の絶えな
かった南湖地区ですが、かつては甲斐
源氏の一流が擴って立つけの基盤が

奈胡義行



大式局

大式局は、文治四年(一一八八)、

当時七歳であつた頼朝の嫡男万寿(後
の二代将軍頼家)の介錯人(養育係)
として頼朝のもとに出仕した女性で、
加賀美遠光の娘です。出仕に際して頼朝
に拝謁し、「大式局」の名を与えられま
した。その後建久三年(一一九二)に
頼朝に次男千鷹(後の三代将軍実朝)
が生まれると、今度は千鷹の養育係に
転じています。

このように頼朝の長男及び次男の介
錯人として選ばれたことは、この時点
における頼朝の加賀美一族に対する信
任の厚さを物語るものといえます。
平成十九年、神奈川県の称名寺の塔
頭である光明院から連慶作の「大威德
明王像」が発見され大きな話題があ
つて、後に重要文化財に指定されました。
この時、この像が大式局の發願によつ
て造られた可能性が高いことが明らか
となり、彼女の鎌倉における力を知る
ことができる発見ともなりました。

バックグラウンド background



二本柳遺跡（平安時代～鎌倉時代の水田　十日市場）



宮沢中村遺跡 鎌倉時代と推定された網代護岸 宮沢）

とされる法善寺は立地するのです。

一連の発掘調査からはまた、湧水の安定的な利用を前提とした開発が行われ、それが不安定な河川の嘗めにより流失した後、安定を待つてまた開発が試みられるという数百年～千年スパンのサイクルを見ることができます。例えは鎌倉時代の水田の下には、多くの

場合、洪水や土石流によって運ばれた厚い砂礫の層を挟んで平安時代や弥生時代の遺跡が眠っています。水に恵まれた地はまた、水に脅かされる地でもあつたのです。どの時代も開発を可能にしたのは豊かな湧水でした。しかし、それが平坦な道でなかつたことを、これら遺跡群は教えてくれています。

我々はそこに、時代を超えて養えないとされる活力を見つかりました。この時期の開発は、律令制の崩壊と庄园の拡大という社会的機運を背景に祭祀の場があわせて見つかりました。甲斐や網代を用いた護岸施設などを見つかり、太師裏丹保遺跡では、鎌倉時代初め頃の水田域の広がる中に建物跡や祭祀の場があわせて見つかりました。我々はそこに、時代を超えて養えないと旺盛な開発への活力、自然と対話し、常に機を窺い、そこにアプローチし続けた先人のエネルギーを見ることができます。甲府盆地西部において、甲斐源氏がまず足跡を残した地は、このように強く、新たな時代への活力みながら進歩されたとみられますか、発掘調査からは、この地域においては平安時代前半（一〇世紀）から、現在も多くの遺跡が発見され、いまや常習洪水地域＝無住というイメージは、確実に過去のものとなっています。

御勅使川扇状地 末端の遺跡群

周囲を高い山々に囲まれた山梨県では、降った雨はいくつの河川となる。不安定で、ともすると身をもぐら河川からの引水ではなく、このような伏流水を源とする湧水であり、これによつて灌漑しうる扇状地下半部の微高地が、相対的に安定した土地としてその後の開発の中心となっていました。

甲府盆地の南部つまり金無川扇状地や御勅使川扇状地の下半部では近年、大規模な道路建設に先立つ発掘調査によつて、このような場所から數多くの遺跡が発見され、いまや常習洪水い干ほつ地帯となつた一方、扇状地を伏流した水は扇端部に湧出し、そこに弧状の湧水線を形成して、その下流が本県への稻作伝播後のフロンティアの

中村遺跡、二本柳遺跡などでは、現地

表下最大四〇もの深さから、古代未から鎌倉時代とみられる水田を中心とする開発の中心となっていました。甲府盆地の南部つまり金無川扇状地や御勅使川扇状地の下半部では近頃、大師裏丹保遺跡では、鎌倉時代初め頃の水田域の広がる中に建物跡や祭祀の場があわせて見つかりました。この時期の開発は、律令制の崩壊と庄园の拡大という社会的機運を背景に祭祀の場があわせて見つかりました。甲斐や網代を用いた護岸施設などを見つかり、太師裏丹保遺跡では、鎌倉時代初め頃の水田域の広がる中に建物跡や祭祀の場があわせて見つかりました。甲斐源氏がまず足跡を残した地は、このように強く、新たな時代への活力みながら進歩されたとみられますか、発掘調査からは、この地域においては平安時代前半（一〇世紀）から、現在も多くの遺跡が発見され、いまや常習洪水地域＝無住というイメージは、確実に過去のものとなっています。



振り返される水害と開発（二本柳遺跡）

富む地域の中心に、加賀美遼光の館跡

御勅使川扇状地の開発

南アルプス市下宮地の神部神社周辺地域は、平安時代中期にまとめられた「和類聚抄」に見られる巨郡大井郷に比定され、その中心地域と考えられてきました。一方、南アルプス市中北部に広がる御勅使川扇状地は、御勅使川の洪水によって厚く砂礫が堆積したことから遺跡の発見が遅れ、人があまり住んでいない地域と考えられてきました。しかし、中部横断道建設に伴う発掘調査を契機として、この二〇年間の調査で状況は一変し、御勅使川扇状地の開発状況が明らかとなってきた。



高尾穗見神社御正体



野牛島・西ノ久保遺跡 上：銅器の存在を示唆する不良品の須恵器 / 下：炭塊

平安時代九世紀に入ると、水資源に乏しい扇央部への開発が始まります。その開発の主な目的はウシ・ウマを飼育する「牧」の開拓でした。扇中央に位置する百々遺跡の調査の結果、一〇〇個体を超えるウシ・ウマの歯骨が発見され、牧を管理する集落であることが明らかとなりました。高尾穗見神社の御正体に刻まれた「甲斐国八田御牧北麓尾」天福元年（一二三三）

| | | | |
|-----------|-----|------|------------------------------|
| | | | |
| 「甲斐」墨書き土器 | 青磁 | 奈良三彩 | 4頭のウマの土坑墓 北を頭に、西を向いて埋葬されている。 |
| | | | |
| 八稜鏡 | 銅製鍾 | | |

の銘文から、「八田牧」と呼ばれる牧が高尾の立地する櫛形山東麓周辺にあつたことは古くから想定されていますが、百々遺跡の発見によってついで具体的な証拠が得られたのです。百々遺跡の他にも坂ノ上女神遺跡や櫛原・天神遺跡、野牛島・西ノ久保遺跡でウマの骨が発見されており、古代から中世にかけて、扇状地全体が「八田牧」と密接に関係していたと言えるでしょう。

百々遺跡の集落内部は溝や渠で区画されていました。その区画された内部の出土遺物から、鋳造や織維などを手がける手工業集団とともに、牧と手工業生産を管理・統括した階層が居住していましたことも推測されています。その人々は奈良三彩や青・白磁、綠釉陶器や灰釉陶器など甲斐国外の生産品を入れてきる広いネットワークを持ち、八稜鏡やさまざまな奢侈品を所有していました。このことから、扇状地扇中央は、中央の皇族や甲斐国司と繋がりをもつた有力者層によつて開発が進められたと考えられます。

奈良時代から進められたさまざまなる有力者層によつて開発が進められたと考えられます。

手工業生産や牧を中心とした扇状地全体の開発は、後の甲斐源氏の経済的・軍事的基盤となり、加賀美氏や小笠原氏が鎌倉幕府の有力御家人となる礎ともなつたのです。

加賀美氏館跡と城



加賀美遠光館跡（市指定 現法善寺）

大同元年（八〇一）武田（韋崎市）の地に開かれた真言宗（当初は法相宗）の古刹法善寺は、寺の由緒によれば遠光によって自らの勢力下にある山寺（南アルプス市山寺）に移され、その後遠光の孫である遠経によって遠光の館であった現在の地に移されたものと伝えられています。

遠光が居を構えたこの地は、古代から開発が進められてきた御勅使川扇状の谷で、古来より交通の要衝として重要な位置を占めていました。

現在は、寺域の南面、西面に水路が通り、南辺と東辺に土塁の痕跡と思われる高みかわすかに残るのみとなっていますが、中世の館跡としての雰囲気がいまだによく残されています。江戸時代には、北側に「築地堀」が残つていたという記録もあり、往古はその全體が堀と土塁で囲まれていたことがわかります。

周囲には、近年の発掘調査の成果から、平安時代以降の農業基盤整備の所産と推定される条里型の地割りが色々と残り、後背の扇状地上には馬の飼育施設であった「八田牧」がありました。また、滝沢川を隔てた西側には現在も「十日市」が開かれる十日市場や後の駿信往還が立地するなど、流通の拠点に恵み、生産・軍事・経済の要衝として絶好の立地を占めていたことがわかります。

現在は、寺域の南面、西面に水路が通り、南辺と東辺に土塁の痕跡と思われる高みかわすかに残るのみとなつていますが、中世の館跡としての雰囲気がいまだによく残されています。江戸時代には、北側に「築地堀」が残つていたという記録もあり、往古はその全體が堀と土塁で囲まれていたことがわかります。

地末端の湧水線上にあり、現在の法善寺境内にも扇状地の伏流水を水源とする島池という湧水があります。この湧水は真言宗寺院である法善寺らしく、弘法大師ゆかりの伝説をもちますが、おそらくは弥生時代以来、地域に惠をもたらす神聖な湧水として、流下の耕地を潤し続けてきたものと思われ、館はこの湧水を取り込む形で設けられていることがうかがえます。

周囲には、近年の発掘調査の成果から、平安時代以降の農業基盤整備の所産と推定される条里型の地割りが色々と残り、後背の扇状地上には馬の飼育施設であった「八田牧」がありました。また、滝沢川を隔てた西側には現在も「十日市」が開かれる十日市場や後の駿信往還が立地するなど、流通の拠点に恵み、生産・軍事・経済の要衝として絶好の立地を占めていたことがわかります。

chateaus & castles 秋山氏館跡



秋山光朝館跡（市指定 現熊野神社）

秋山地区集落の山よりの小丘に、熊野神社が祀られています。現地の眺望はすばらしく、富士川流域を眼下に望することができます。三方を崖に囲まれたこの小丘は、一方で後背の山地に接続していて、その後背の山地には中野城、雨鳴城といった山城の遺構が尾根沿いに連なります。これら山城については現在、中野城は南北朝時代以降、雨鳴城といった山城の遺構が尾根沿いに連なります。これら山城に

ついでには現在、中野城は南北朝時代以降、雨鳴城といった山城の遺構が尾根沿いに連なります。これら山城については現在、中野城は南北朝時代以

降に、雨鳴城は戦国時代に造られた可能性が指摘されていますが、地域では永く光朝の要害と伝承されてきた遺構です。

なお秋山の熊野神社は、江戸時代にその境内から建久八年（一一九七）の銘を持つ經筒が発見されたことでも知られています。その説文から光朝の弟である光経が一族の安寧を祈つて埋納したものであることがわかり、現在は県の指定文化財となっています。

この他周辺には、光朝開基といわれる光昌寺や光朝の廟所があり、その傍らには光朝、同夫人ならびに遠光の墓と伝えられる三基の五輪塔（市指定文



銅製經筒及び付属品（県指定 伝熊野神社境内出土）

小笠原氏館跡

名字の地

長清の本拠は原小笠原莊とされ、今も「御所庭（ごしょのにわ）」や「的

小笠原小学校校舎のレリーフ



永徳三年（一三八三）の「小笠原長基自筆譲状」は長基が嫡子長秀らに自らの所領の相続を認めた文書といえま

然的に「原小笠原莊」は南アルプス市を指すと考えられます。

「内朝尾郷」と記される史料から、朝尾郷が北杜市浅尾を指すと考えられ、必

明野村)にもあり、中世の古文書にも「山小笠原莊」「原小笠原莊」とふたつの小笠原が登場します。「山小笠原莊

「小笠原」という地名は北杜市（旧

西二在リ松樹鬱蒼方四十間許リノ間地
ナリ相伝フ小笠原長清居宅ノ南庭」と

館を構えたとされています。『甲斐国志』には「御所ノ庭」について「村ノ

も「御所庭（ごしょのにわ）」や「的場」の地名の残る小笠原小学校付近に

名作の地「原小笠原莊」

謀与
子思六
卷之二

大正時代、小笠原小学校の敷地から天神社が出土し、館の戌亥の方角に祀

観音殿に埋葬されましたが、応仁の乱で焼失したこと、岐阜県荘福寺、長

長治ゆかりの地

市内小笠原周辺には長清に関連する地がいくつか伝承されています。



御所天地（竹原神社境内）



易经公司

小笠原殿ノ墓ト伝フ

小笠原長清は京都で没し、長清寺の

同じく山寺には、加賀美達光の時事草、のものとされる仏像群、国重要文化財の「木造大日如来及四波羅蜜菩薩坐像」や小笠原長清ゆかりの「毘沙門天立像」のある宝珠寺があり、曹源寺や、加賀美の法善寺（前へ一ページ上段参照）との関連が示唆されます。

また、長清は、現在の山寺の地に「曹源寺」(現存せず)といふお寺を源氏の菩提のために創建したといい、山寺の地名はこの寺から始まつたといわれています。

明治二四年頃のこと、開創した際に石に棺が出土したことによって下宮地にあつた若宮神社の社殿を移築したもので、平成十四年に修復が行われています。小笠原氏顕のシンボルともいえます。

上野にある椿城。上野城は、小笠原長清の孫、上野六郎盛長が築いたといわれます。その場所には現在、上野家あるいはその後を継いだ秋山家の五輪塔群や本重寺などが伝わります。





椿城跡の五輪塔群

市内に広がる曾我物語の世界

芦安地区的「虎御前」と野牛島地区



3枚目：雁の群れに亡き父を慕う兄弟。



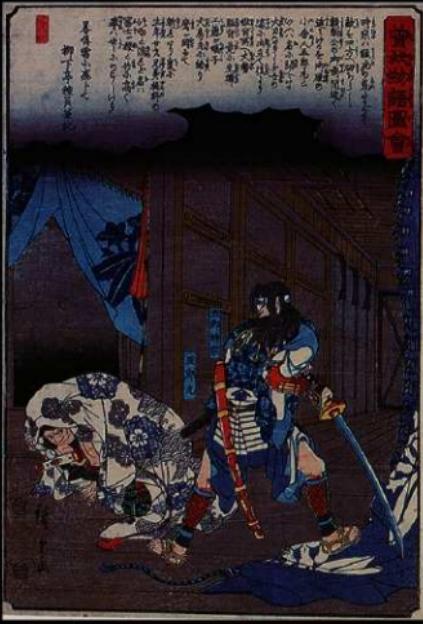
12枚目：巻狩りでの仇討ちを決意した兄弟は、母と今生の別れの宴を開く。



10枚目：兄弟は駿河国津で花経を討とうとするが、果たせなかった。



23枚目：兄弟は祐経の寝所に討ち入り、本懐を遂げる。



26枚目：小倉童五郎丸は、着物を着て油断させ、五郎を取り押さえる。

物語の筋書きは次のようなものです。平安時代の末期、伊豆の武士たちの間では同族でも所領争いが繰り広げられていました。工藤祐経も從兄に当たる伊東祐親の子河津祐泰を殺害します。その報復として家来に伊東祐親を襲わせ、祐親の子河津祐泰を殺害します。残された祐泰の子、十郎と五郎の幼き兄弟は父の仇を討つことを心に固く誓い成長してきます。この間に、未亡人となつた祐泰の妻が相模の曾我祐信と再婚したため、二人は「曾我兄弟」と呼ばれることになります。時は移り源頼朝が鎌倉幕府を開くと、工藤祐経は将軍を支える重臣となりました。兄弟は、頼朝が有力な御家人を集め富士の裾野で巻狩りを行ふことを知ると、その機に仇討ちを行ふことを決意しま

す。成立時期ははつきりしていませんが、鎌倉時代の終わり頃に物語としてまとめられ、時代とともに様々なエピソードが加えられながら、江戸時代に現在の形に落ち着いていったようです。

物語の筋書きは次のようなものです。平安時代の末期、伊豆の武士たちの間では同族でも所領争いが繰り広げられていました。工藤祐経も從兄に当たる伊東祐親の子河津祐泰を殺害します。その報復として家来に伊東祐親を襲わせ、祐親の子河津祐泰を殺害します。残された祐泰の子、十郎と五郎の幼き兄弟は父の仇を討つことを心に固く誓い成長してきます。この間に、未亡人となつた祐泰の妻が相模の曾我祐信と再婚したため、二人は「曾我兄弟」と呼ばれることになります。時は移り源頼朝が鎌倉幕府を開くと、工藤祐経は将軍を支える重臣となりました。兄弟は、頼朝が有力な御家人を集め富士の裾野で巻狩りを行ふことを知ると、その機に仇討ちを行ふことを決意しま

悲劇のヒロイン 虎御前

曾我兄弟の兄十郎の恋人として登場する虎御前は、大磯の長者の娘で、後に成長して街道の美女と言われる遊女となりました。この虎御前、芦安地区の伝承では芦安通の生まれで、縁する虎御前は、大磯の長者の娘で、後に成長して街道の美女と言われる遊女となりました。この虎御前は、まだ一九歳でした

がその悲しさのあまり尼となり、兄弟の菩提を弔うため信濃善光寺に向かいます。その旅の途中と参拝後、生まれ

す。この時、十郎には大磯の遊女である美女の誉れ高い虎御前という恋人がいましたが本懐を遂けるために別れを告げます。建久四年（一一九三）五月二十八日、ついに曾我兄弟は父親の敵工藤祐経を討ち果たしたのです。しかし、駆けつけた武士たちに兄十郎は討ちとられます。一方、將軍頼朝にこの次第を報告しようと進む弟五郎は、向かってくる武士たちを怪力でなぎ倒してしまった。頬朝を警護する御所五郎丸は一計を案し、女性の着物を被って油断させると、後ろから五郎をやっとのことで取り押さえました。翌日、將軍頼朝の面前で五郎の尋問が行われ、祐経の遺児に請われた頼朝は五郎の死罪を言い渡しました。兄弟二弔う旅に出たと伝えられます。

the tale of the soga



御所五郎丸の墓（市指定 野牛島）



伝曾我十郎木像・伝虎御前木像
(市指定 大曾利謫居神社)



野牛島・西ノ久保遺跡出土の和銅鏡

右：曾我物語図会 大錦絵 30枚
描 歌川広重 弘化年間（1844～47）作画（正眼寺蔵）

「東海道五十三次」で知られる広重の作。曾我物語は江戸時代には歌舞伎や淨瑠璃の演目となり、さらに浮世絵の題材となるなど庶民の人気を博した。正月の歌舞伎は「曾我物」と言われるほどで、五郎丸の役は歴代の市川左団次や市川九蔵、市川染五郎などが演じ、浮世絵に描かれてきた。2014年の新春歌舞伎でも市川海老蔵によって「曾我物」が演じられている。



29枚目：虎御前は兄弟の巻を弔うため、諸国塗場めぐりの旅に出た。

悲運の武士 御所五郎丸

曾我五郎時致から頼朝を守った御所五郎丸ですが、功を上げたにもかかわらず、女装して油断させたという行為が武士にあるまじきと、鎌倉を追放され、南アルプス市の野牛島の地に流れられたのだと、地元では伝えられています。現在、野牛島の中心に建つ觀音堂には、五郎丸の肌守りと言われる地蔵菩薩の木像が祀られ、お堂の傍らには五郎丸の墓が建てられています。また、お堂の前のビャクシンは五郎丸が育いた杖が成長したものだとも伝えられています。

ちなみに「曾我物語」の一番古い形とされる真名本や「吾妻鏡」には、五郎丸が女装したという記述は見当たりません。主役である曾我兄弟の活躍を際立たせるために、女装は後から加えられたエピソードなのかもしません。五郎丸は、今も地元の人々から慕われ、毎年七月二三日、野牛島地区の

故郷の安通村へ立ち寄り、兄弟の追善供養を続けたといわれています。曾我氏や虎御前を祀る安通の伊豆神社跡近くには、虎御前が鏡立て化粧をしたという「虎御前の鏡立石」を今まで見ることができます。一方、芦安地区大曾利の謫居神社には、伊豆神社から移された曾我十郎と虎御前と伝えられる二体の木像が納められています。

なげ曾我物語の登場人物に関する史跡が芦安と野牛島にあるのか。虎御前については、異本曾我物語に「大草郷芦倉・奈良田村などは、工藤庄司が知行書なり」との記述があり、伊藤氏や河津氏と同族である工藤氏が芦安を所領していたことから、兄弟の靈を鎮魂するため、工藤氏が伊豆神社や

木像を作らせたのではないかとの説もあります。五郎丸について、甲斐國志では五郎丸が甲斐源氏一條忠頼に一仕えしていただけ、その領地である地に流されたとの見解をとっています。五郎丸と直接結びつくかは不明ですが、野牛島・西ノ久保遺跡で平安時代末の和鏡と刀子を副葬した土坑墓が発見され、和鏡という極めて貴重な副葬品から、広範囲のネットワークを持つ有力者かいたことが明らかとなっています。この鏡は、今後甲斐源氏と御所五郎丸の新たな歴史を映します手がかりになるかもしれません。

最後に、「吾妻鏡」には頼朝による五郎の尋問の際に、幕府の重臣である小笠原長清も参列していたことから書かれています。長清の睡には仇討ちを遂げた五郎の姿かどのように写っていましたのでしょうか。

人たちによって供養するお祭りが開かれています。

曾我物語の広がり

祈り

prayer



大日如来及び四波羅蜜菩薩坐像（重文 宝珠寺）



木造毘沙門天立像（市指定 宝珠寺）



三七行かせ給え
なむあみたぶつ
なむあみたふと
りんしやう
新やうほん
行一人めう
かならす／＼
なむあみたぶつ
かならす／＼
三七行かせ給へ
三七行かせ給へ



阿弥陀如来坐像と納入文書（市指定 隆円寺）

鎌倉時代、人を殺めることを宿命とする武士が、後生安樂を願つて仏門へ深く帰依したことはよく知られています。南アルプス市にも甲斐源氏ゆかりと伝えられる仏像をはじめ鎌倉時代の信仰の証が数多く残されています。その中で、宝珠寺の「大日如来及び四波羅蜜菩薩坐像」は平安時代末期の作とされ、当時この地に勢力を持つた加賀美遠光が造立に関わった可能性が指摘されています。京都や奈良で制作されたものと比べて遜色ない造形を見せ、その造立に関わった人々が中央文化を導入することができる力を持っていたことを示唆します。

同じ宝珠寺の「毘沙門天立像」は、

像高二〇一、七センチの大像です。鎌倉時代初期の作例で、遠光の次男小笠原長清が造立に関わったと見られています。長清は、東大寺の復興造仏の中でも精朝の命により多聞天（毘沙門天）を担当していますが、「吾妻鏡」によれば頼朝は、その際名御家人に、仏像を造立するにあたっては、その仏像との結縁を結ぶことを求めており、こうしたことから長清が本像を造立する契機となつたとも考えられます。

隆円寺の「阿弥陀如来坐像」はこれよりやや下る鎌倉時代中頃の作。調査の際取り出された納入文書からは、当時の人々の阿弥陀如来に託した浄土往



大威德明王像（重文 称名寺光明院所蔵 神奈川県立金沢文庫保管）



八幡神本地仏鏡像（県指定 法善寺）



加賀美遠光坐像（市指定 光昌寺）



秋山光朝坐像（市指定 光昌寺）

生の切ない願いを知ることができます。また、甲斐源氏の阿弥陀信仰については、浄土信仰の高まりに加え、阿弥陀如来が源氏の氏神である八幡神の本地仏であることから重要視されたという指摘があり、本像もそのような関わりの中での造仏かもしれません。

遠光の居館跡と伝えられる法善寺には、阿弥陀三尊像の形をとり、正応三年（一二九〇）の銘を持つ「八幡神本地仏鏡像」が残されています。

なお、後には彼ら甲斐源氏自身が畏敬の対象として、地域の信仰を集める存在となり、例えは秋山の光昌寺には、「加賀美遠光坐像」「秋山光朝坐像」が祀られています。遠光像は、遠光像としては最古の作例である室町時代前半、光朝像は江戸時代の作例です。

最後に紹介する「大威德明王像」は、南アルプス市ではなく、神奈川県の名刹「称名寺」の塔頭「光明院」で平成一九年に発見され、現在は神奈川県立金沢文庫で保管されている作例です。納入文書から連慶の作であることが明らかにされ、のちに重要文化財に指定されました。この像を連慶に造らせた源大式殿が遠光の娘大式局である可能性が極めて高く、彼女の鎌倉での力を知ることができるとともに、南アルプス市と鎌倉の歴史舞台を結びつける重要な発見となりました。

小笠原流礼法

「小笠原流礼法」を、現在小笠原流礼法の活動を展開している「派の言葉を借りると」

「武一が社生活を前にするために作られ受け継がれてきたもの」であり「日々の行動として役に立つ、無駄なく、他から見て美しいもの」といえます。

清和源氏に伝わるとされる伝統である「糸方」(=弓馬故実または弓法)」

を代々小笠原家の總領が「子相伝」で受け継ぎ、長清以降小笠原家は「流鏑馬」など弓馬儀礼の際に名を連ねる弓馬に堪能な柄として活躍します。

小笠原、御所庭付近の一の出し造跡などで、古代終わり頃から中世にかけての「薙股旗」が出土しています。流鏑馬や狩獵、武士の鍛錬などで用いるやじりです。



相手を大切に思う

「こころ」

～未来へ

武家に重んじられたこととなつたといえます。

概ね室町期に「弓」・「御（馬）」の法に「礼」が加えられて三法からなる

方で、形骸化し堅苦しいものという誤解を広めたともいわれています。しかしながら信濃小笠原家では、この三法の本質は、「己を慎み、相手を大切にする心を形にあらわす」ことにあるとさ

れます。

未来へ

武家の指導的立場となり、現在の生

活文化の礎を築いた小笠原家。

「相手を大切に思う心」の小笠原家

が南アルプス市から始まることにはまさに誇りといえ、甲斐源氏が「血筋」

を大切に育んできたのであるならば、

わがまちは、まちの「地筋」を大切に

育んでいきたいものです。

市内には甲斐源氏の活躍を示す史跡

が数多く残されています。そのような

土地であることを誇りに、小笠原流礼

法の基盤が整えられたとされ、小笠原流礼法を大成したのは戦国期の信濃守護であった小笠原長時・貞慶の頃といえます。長時は武田家に破れ信濃を離れたながらも小笠原家であること

を誇りに、故実の集成・伝授を積極的に行い、自家の故実に、同じく故実家として知られる伊勢家や今川家などの故実を取り込んで大成していったとみられます。

信濃守護であつた信濃小笠原家は戦

国期には糸方の断絶を避けるために

「子相伝」を解き、近親の分流や有力家臣にも積極的に伝授したといいます。

小笠原家の活躍の場は京や信濃から全国へと展開し、江戸期には、總領家とされる信濃小笠原家で最大の石高をもつ小笠藩主家や、その他あわせて六



小笠原流礼法体验講座のひとコマ（折形）



小笠原流礼法体验講座のひとコマ（立ち居振る舞い）

「相手を大切に思う心」
さあ、未来へ
私たちが伝える番です。

平成二五年度からは学校教育にも小笠原流礼法を導入しており、南アルプス市の土地に刻まれた甲斐源氏の伝統を、未来へと継承する取り組みがなされています。

法の師範の方や、小笠原長清公顕彰会をはじめ、小笠原家や甲斐源氏のすばらしい活躍の足跡を伝える活動が行われています。師範や顕彰会による礼法講座や教室も二十年以上の歴史を誇ります。

歴史舞台を駆けた

南アルプス市の
文化財

甲斐源氏

南アルプス市教育委員会



地域の特性を活かした史跡等総合活用支援推進事業

発行日 2014年3月27日

編集・発行 南アルプス市教育委員会

〒400-0492

山梨県南アルプス市駄沢1212

電話 055-282-7269

(株)少国民社

印刷・製本

文化財 Mなび
MR MAM ALPS Culture
I want to know about culture





歴史舞台を駆けた

南アルプス市の
甲斐源氏

南アルプス市教育委員会



